

# 木と友だちになろう

## ーツリークライミング® ジャパン一五年の歩み―

ジョン ギャスライト

### 樹上から見えた広い世界

幼い頃の夏休み、僕はおじいちゃんが住むカナダ西海岸のバンクーバーアイランドで過ごす事が多かったのです。おじいちゃんの家は太平洋を見渡すビーチのすぐ近くで、毎朝ビーチに散歩に行き海から流れてくるゴミを拾うのが大好きな少年でした。特に日本からの一升瓶は大好きでした！ある日、海岸で拾った僕の運命を変えた木片、それが下駄だと知ってから、日本との縁を感じ、やっと一九八五年に二三歳になって初来日して、それから日本の女性と結婚して三〇年、日本に住んでいます。

僕の父は、アメリカでレーザー機器の製造工場もつ会社を経営していました。当時とても景気が良くて大きな家に住んでいました。幸せなファミリーで順調に小学校の低学年のころまで何も問題がなかったのですが、ある時、父が事業に失敗し、それが原因で父がアルコール依存症となり家族もうまくいかなくなって両親は離婚しました。僕はその後、施設に預けられ、しばらく親兄弟と別れて暮らしていました。その後、母は再婚相手を見つけ、それを機にカナダに帰る事になりました。

大好きなおじいちゃんが住んでいるカナダに戻るのは、僕にとっては嬉しいことでした。ところがカナダの小学校では、

僕のアメリカナまりの英語や勉強が遅れていて勉強についていけなかったこと、アリゾナは暑い所でしたので丸刈りの髪型にしていたこと、そして施設に入った時からともるようになった癖がぬけず、カナダの小学校でいじめられっ子になったのです。

ある日、走って家に帰るとおじいちゃんが「どうしたんだ？今にも泣きそうな顔をしているよ」。僕はその時、我慢していた涙を一気に流して大泣きをしてしまいました。母は新しいパートナーと嬉しそうに家族を立て直そうとしている、妹と弟もそれなりに学校に通って頑張っている、自分は長男だからしっかりしなくてはと自分自身に言い聞かせて、いじめっ子が待つ学校に毎朝立ち向かっていったのです。その辛い気持ち、誰にも言えなかった悲しい気持ちが一気にあふれだしたのでしよう。しばらくおじいちゃんの腕に抱かれて泣きました。

おじいちゃんは、僕の涙がおさまると「よおーし！こんな時は木に登るのが一番だ！一緒に行こう」と僕の手を取り、近所の丘の上の大きな木まで行きました。おじいちゃんが「この木に登っていくぞー」と、すいすい登っていききました。その後ろから僕も一生懸命登っていったのです。その時は、おじいちゃんはいったい何をしようとしているのか、さっぱり理解ができませんでした。高いちやうどいい枝までつく

「ジョン、ゆっくりそこに座って後ろを向いてごらん」と。振り返ってみると、僕の目の前には大きな世界が広がりました。海に向こうの小さな船も見えるくらい大きな世界です。

その時、おじいちゃんはこう言いました。「ほら、世界は大きいだろう？学校だけがすべてじゃない。向こうに広がる世界がみんなジョンを待っているぞ、問題が目の前に立ちふさがっている時はこうして視点を変えてみると、結構その問題が小さいことに気づくんぞ、ジョン、小学校もあんなにちっほけな物だ」。その時の僕は、遠くの世界が僕を呼んでいるようにも思えたのです。樹上から見えた世界が、これほどまでに自分の悲しみがぎゅぎゅ詰まった心の扉を開いて大きな世界への第一歩を踏み出させてくれた、あの瞬間を忘れられず、木の上が大好きになりました。

### 日本にツリークライミングを普及したわけ

「こら！勝手に木に登ったらあかん！」公園の、自分の背より低い横に伸びたベッドみたいになちやうと良い枝の上で本を読んでいた時でした。公園の管理人が僕に言いました。その公園のルールは木登り禁止だったのです。もちろん、日本に来て小さなアパートに住んでいた僕の庭は唯一、近くの公園でした。その時思ったのは、日本の子どもたちは木登りしないのかな？と。こんな両手を広げて腰を下ろして。登って



おいで。と言わんばかりに待っていてくれるやさしい木に抱っこされたら、子どもたちは大きくなって木に対してやさしい気持ちになっていくのに……。公園の看板の「自然を大切に」と「木登り禁止」が目に入る度、僕の心は切なくなりました。

そんなある日、僕は車いすの女性と友だちになりました。彼女は僕が木に登っている姿を見て「私も昔はおてんばさんで木登りしたのよ！でも今はこんな体になって木に登るなんてむりよね。足が動かないんだから……」彼女が帰った後、僕はその言葉が頭から離れなくて、どうすれば木に登れるだろう？と考え始めました。カナダで熊の調査をする為に、ロビーにサドルという腰ベルトをつけて既に木に登っていた僕は、工夫すれば登れるかもしれない！と思い始めました。そして、いろいろ調べていたら、アメリカにレクリエーション・ツリークライミングの団体、ツリークライマーズ・インターナショナル（TCI）という団体があり、その代表のピーター・ジェンキンス氏に教えてもらおう！と思いつき翌週、アメリカアトランタまで会いに行っている簡単な簡単な登り方を教えてもらいました。でも、障害を持った人たちのツリークライミングは、誰一人として技術もノウハウも持っていないことが分かりました。しかし、約束を果たしたくて日本に帰国したと同時にいろんな道具を駆使し、テストを重ね

成にも力を注ぎました。ツリークライミングジャパンで養成した公認インストラクターや公認ファシリテーターは、現在は約二〇〇名。彼らが各地で講習会やイベントを開催するようになり、日本全国でツリークライミング愛好家の人たちの層も厚くなってきました。

僕も今でもよくイベントに行き、子どもたちと一緒にツリークライミングを通じて、人にやさしく森にもやさしくなれる心を育てよう、子どもたちと樹上で楽しい時間を過ごしています。そして、木は一本一本違うけれど、目に見えない土の下で根っこを絡ませてお互いを支え合っている、栄養を分け合っているんだよ、とお話します。そして、その日に一緒に体験した友だち、家族、その日初めて会った人同士も一人ひとりそれぞれだけれど心でつながり、目に見えない根っこのような糸で結ばれて、ひとつの社会になっているんだよ、とお話しています。

### 日本の自然を、公園を、森を豊かにする

ツリークライミングを体験しにやってくる子どもたちに、まず森に入っていく時には「おじゃまします！」と自分が、森に遊びに来させていたいただきました、という気持ちで森に入っていくようにしています。遊び終わると必ず木に「ありがとう！」と挨拶をして帰ってもらいます。そして体験会の

特殊なシステムを作り、彼女と一緒に練習を始めたのです。すると周りにそれを手伝ってくれる仲間があつまり、いつの間にか彼女の夢をみんなが応援し、ついに彼女は七mくらいの高さの木に登ることができました。「私、鳥になったみたい」と、自分の車いすの世界から樹上の世界へ新しい冒険を成功させた彼女は、次の夢も語ってくれました。それは、世界一大きなジャイアントセコイアに登ること。そして二年の歳月をかけたトレーニングをして、彼女は世界一の大きい巨木・ジャイアントセコイアのツリークライミングに成功しました。これを日本のテレビや海外のメディアが大きく取り上げ、彼女は世界のチャレンジャーとして大きな勇気を僕たちにくれました。

その間、集ってきた仲間と立ち上げたツリークライミング普及団体が「ツリークライミング®ジャパン（TCJ）」です。二〇〇〇年に設立して現在に至り、今ではツリークライミングの技術を習得したライセンス保持者が三、〇〇〇人、そして体験者はもう数えきれません。二〇〇五年の日本国際博覧会では、期間中三、〇〇〇人以上が参加した体験会を行い、自然体感プログラムとして世界にツリークライミングプログラムを発信し、現在も各地で数多くのイベントが開催されています。

また、そのような楽しいプログラムを提供できる指導者養



写真 1 みんなでお出迎え

最後に、体験成功！を祝ってコングラチエレーションカードを渡します。そこには子どもたちが木に登ったことを讃えるとともに、一緒に遊んだ木は、昔のアメリカンデリアンが木を「立っている人」として命

ある大切なものとして守ってきたこと、その木と友だちになつてありがとうという気持ちを、自然にやさしい生活をすること木にお返ししようね、と書いてあります。

ツリークライミングの良いところは、人間主体ではなく自然が主役、当たり前にある自然に改めて感謝するという気持ちになれることです。また、森や公園のフィールドは始めと





写真2 ツリーボートでひと休み

終わりは同じ状態、もしくはそこに植えてある樹がきれいに剪定されて明るくなって手入れされた状態でイベントが終わることです。眠っていた森を活かして元気にする、その為にインストラクターにはフィールド



写真3 ツリークライミングロープがセットされた木

これからもいろいろなところで有効なプログラムとして使っていただけと書いています。僕はいろいろな活動する中でいろいろな意見をいただいていたけれど、本当に自分がやっていることは良いことなのかどうか分からなくなるとも実際はありました。そこで、このプログラムをど

作りも教えます。今では公園の方に、一度も事故のない私たちの活動や実績を理解していただき、国営公園や公共の森、都市型公園などでもツリークライミングが体験できるようになりました。ツリークライミングは人材養成と専用の道具の準備に少し時間とお金をかけるけれど、ツリークライミングというプログラム自体に施設などを建設する必要がないので、

うしても立証したくて、名古屋大学大学院に入学し生命農学研究科で四年間、ツリークライミングの人間と社会に与える効果を研究し博士号も修得しました。その論文の評価はこのように出されました。「ツリークライミングの社会的効用と参加者の環境意識の向上の究明に取り組んだユニークな論文であり、ツリークライ

ミングに関する世界初の研究として国内外で高く評価され、健康増進、環境意識と社会的効用の向上を目標として、世界的なツリークライミング活動のプログラムの改善と普及に役立つのみならず、里山あるいは緑地で行われる他の野外活動のためのケースモデルとして幅広く貢献することが期待されること、本論文の独自性、獨創性、ならびに実用性を高く評価していただきツリークライミングジャパンの活動をさらに高めることになった」

### 一五周年でやっと形になったTCJ

TCJは、二〇一五年の四月二十九日(旧みどりの日)で一五周年を迎えました。今年はその頃に、東京の日比谷公園・グリーンサロンで日本全国からツリークライミングジャパンの仲間と共に一五周年記念パーティーを開催し、ここまで歩んできた喜びを分かち合いました。改めて林野庁、公園管理事務所の方々、環境省、その他行政の方々の理解で活動の幅が大きくひろがり、たくさんの子どものためのツリークライミング体験が実現できていることに感謝しています。

これまで事故もなくやって来たのは、TCJ公認インストラクターたちの技術と知識の伝授、そして笑顔の裏でいつも安全チェック、危険回避を考えている指導者が居るからです。これからは緩まないように常に樹木と向き合い緊張感を

持ち、楽しい笑顔の花を樹上に咲かせるよう歩いていきます。

### 未来に向けてツリークライミングの可能性を探る

現在は、レクリエーションとしてのツリークライミングのもう一方で、ツリークライミング技術を取り入れて剪定作業をするプロの職人の人々を対象に、アメリカにあるISA(インターナショナルソサエティー・オブ・アボリカルチャー)という国際組織のもと、専門家を養成するアボリスト・トレーニング研究所も設立し、アメリカのアボリスト技術を教える事も始めました。

また、今年の秋はその人たちと共に、アメリカ・カリフォルニア州に残された数少ないジャイアントセコイアの森の自然保護活動のために渡米を予定しています。日本の林業技術とアメリカのアボリスト技術を融合させ、世界有数のジャイアントセコイアを間伐により保護するプロジェクトを行います。

さあ、樹上の世界へ行きましょう！いつも見上げる木の上から見下ろす世界、鳥の声が同じ高さで聞こえ、緑の香りに包まれて、頬をさわやかな風が通り抜けていきます。一人でも多くの人に樹上の世界を味わって欲しいと思います。

(ツリークライミングジャパン代表・中部大学教授)